

令和 6 年 6 月 20 日現在

機関番号：82616

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K03049

研究課題名（和文）大学生における対人葛藤の創造的調整を促進する介入モデルの開発と効果検証

研究課題名（英文）Development and Evaluation of an Intervention Model to Promote Creative Conflict Resolution in University Students

研究代表者

山地 弘起（YAMAJI, Hiroki）

独立行政法人大学入試センター・独立行政法人大学入試センター・教授

研究者番号：10220360

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本の大学生を対象に、対人葛藤の創造的調整を促進する介入モデルの効果検証を当初の目的としていたが、コロナ禍のためオンライン授業での学生の体験や対人課題を探索することに焦点を移し、対人葛藤への対処をテーマとした授業開発のなかで匿名性の活用、ロールプレイの活用、介入モデルの実践化を試みた。それらの成果をふまえて、関連する社会情動的技能を高める大学教育改善に資する出版物の制作を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

全人的教育の重要性が主張される今日の大学教育では、社会情動的技能の育成への関心は高い。日本では大学生の社会情動的技能の向上を図るプログラムはあまり報告されていないが、海外でも大学生の対人葛藤調整に焦点を当てたものはほとんど報告されていない。本研究は、多文化共生の課題に直面しながら、日本の文化的特徴として潜在化したり回避されたりしやすい対人葛藤の体験を取り上げ、その創造的調整の教育指針を示す出版物を制作したことに独自の重要な意義がある。

研究成果の概要（英文）：The original aim of this study was to verify the effectiveness of an intervention model that promotes creative conflict resolution among Japanese university students. But due to the coronavirus pandemic, the focus shifted to exploring students' experiences and interpersonal challenges in online classes, and we attempted to utilize anonymity, role-playing, and the practical application of the intervention model in the development of courses on dealing with interpersonal conflict. Based on the results of these studies, we produced a publication that contributes to improving university education by enhancing related social-emotional skills.

研究分野：教育心理学

キーワード：大学生 体験学習 対人葛藤 葛藤調整 社会情動的学習

### 1. 研究開始当初の背景

近年、コンピテンシーを強調する方向に変わりつつある学校教育において、子どもたちの非認知的能力あるいは社会情動的技能の重要性が注目されている。その背景には、社会文化的背景を異にするさまざまな他者と相互調整や交渉を行っていくには、従来よりも高度な対人技能が求められるという危機意識もあるように思われる。例えば、世界的な教育改革の指針を提案するOECDの学習フレームワーク2030では、「新たな価値を創造できる」「責任を引き受けることができる」といった能力に加えて、「対立や葛藤を調整できる」という対人的な能力を重視しており、これら3つの能力を「変革コンピテンシー」と呼んでいる。

しかし日本では、子どもも大人も他者とのつながりに過剰に配慮し、排除を恐れ、他者による受容を確証したいコミュニケーション強迫の状態にあるとする研究報告が少なくない(土井, 2014; 木村, 2012 など)。そうした状態では、各自の主体性のもとで創造的協働を展開していくことは容易でないと考えられる。この点は大学教育においても同様と思われ、本研究代表者らの研究では、他者からの評価に過敏な学生の場合、アクティブラーニング型授業で汎用的技能が伸びにくいことを見出している(山地・川越, 2020)。国際比較からも、韓国、中国、米国と比べて日本の大学生は社会的場面での主張性が低く(原田ほか, 2014)、米国と比べて日本の成人は葛藤の潜在化や対立回避の傾向がある(大淵, 2015)ことが報告されている。

もちろん、日本の対人関係文化は共同体の調和の維持には機能的と思われ、一概には批判できない。しかし、否が応でも多様な他者と関わらなければならない今日、必要があればより主張的に協働でき、軋轢が生じた場合には視点や背景の相違を斟酌しつつ創造的に調整できる能力が従来以上に要請される。そこでの主張性や葛藤調整のあり方は欧米のスタイルとは異なるかもしれないが、独自の生産的な協働スタイルを探ることで、新たな価値の創造や責任ある意思決定といった、「変革コンピテンシー」の他の能力の育成にもつながりうる。

### 2. 研究の目的

上記の背景と問題意識をふまえて、本研究では以下の3点を目的とした。

日本の大学生を対象に、対人葛藤の創造的調整を促進する介入モデルを開発する

介入モデルの効果を初年次から4年次まで多面的・縦断的に検証する

制作物を通して、関連する社会情動的技能を高める大学教育改善に資する

なお、ここでいう介入とは、学生が体験する対人的な葛藤をていねいにとりあげ、それらの背景を吟味したうえでどう調整すべきであったかを検討しあい、次への学びとするための教職員側の働きかけをさす。対象を大学生とした理由は、アルバイトやインターンシップ、海外研修や留学、地域や企業と連携したプロジェクト学習やボランティア活動など、学外での活動において広い意味での「異文化」と遭遇し葛藤体験をする機会が多く、かつそうした体験から自身のあり方や社会文化的背景を自覚化し相対化することが可能な発達段階に至っているからである。

### 3. 研究の方法

本研究は縦断的検討を行うため5年計画とし、その初年度に研究分担者の所属大学でのプロジェクト学習や海外研修等を対象の学習活動として選定していた。しかし、初年度末から4年度までは、コロナ禍のために、予定されていた学習活動が中止されたり大幅に縮小されたりした結果、介入対象となる対人葛藤の体験が変質しただけでなく、集合ワークショップ形式による密接な言語的・非言語的な関わりが前提となる当初の介入モデル(図1)に大きな変更を迫られた。

そこで2年度以降、オンライン授業での学生の体験や対人課題を探索することに焦点を移し、オンラインでの介入ワークショップの可能性を模索するとともに、上記目的の に向けて実践研究の成果をまとめることとした。

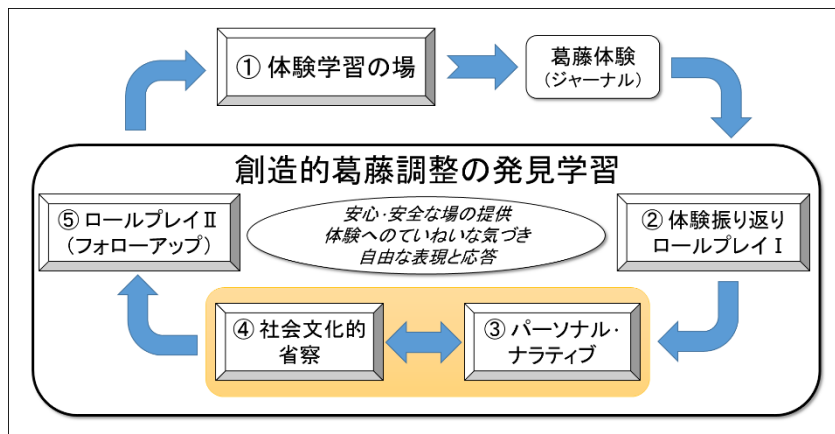


図1 介入モデルの基本枠組

## 4. 研究成果

### (1) オンライン授業での検討

メディア制作のグループ作業で、当初は個別制作を希望していた学生の多くが、授業後のインタビュー調査でグループ作業の良さ、意義にふれていた。主な理由は、自分だけのリフレクションでは気づけないことが、グループメンバーとの議論で気づかされ深まるからということであり、学習過程での対人的な葛藤や回避、妥協、合意形成等の重要性が体験的に理解されていた。

一方、多くの大学でオンライン授業から徐々に対面授業に戻して行く中で、それらを歓迎する学生だけではなく、オンライン授業に慣れてしまい、リアルな人間関係の構築に消極的、もしくは避けようとする学生も見受けられた。こうした課題について学生にインタビュー調査を行い、今後の学生対応等について検討した。また、協働学習の文脈で、オンラインから授業の半分程度が対面式になる過程で、スムーズに移行した部分とそうでない部分があったことがインタビューで明らかになった。学生たちは、オンラインでの討論の補完として対面での問題解決を行うとともに、オンライン独特の気遣いを基盤とする関わりの改善方法を獲得していることがわかり、それが新しいメディアコミュニケーションにつながる可能性が示唆された。

### (2) 授業開発

#### 匿名性の活用

多くの学生が他者との繋がりにも過剰に配慮し、排除を恐れて他者による受容を確証しようとするコミュニケーション強迫(コミュ強迫)の状態にあると考えられることから、オンライン授業における表現活動の中で学生がどのようなコミュ強迫を持ちうるのかを調査した。その結果、ほとんどの学生が何らかのコミュ強迫を抱えており、匿名性を活用することでコミュ強迫が軽減され表現活動が促進されることが示唆された。また、真正の学びをめざすには、学校での人格-本心とは別のところで場をうまく受け流すために受け入れている人格や、いわゆる教員が良い点を与えるような人格-からいかに離れることができるかが課題となるため、「学校人格」の軽減策を含めてオンライン授業の可能性を検討した。このように学生の対人関係にまつわるコンフリクトの性質を「コミュニケーション強迫」および「学校人格」として捉え、「匿名性」を活用したキャリア・デザインのオンライン授業を実施したところ、「匿名性」の活用が「学生(当事者)のニーズ」に合致するという結果を得た。

#### ロールプレイの活用

対人レベルから社会レベルまで、我々の日常では対立や葛藤が不可避であるため、葛藤への向かい方やその創造的解決の方法を学生はどのように学べるかについて、交渉教育、平和教育、ライフキャリア教育等の実践報告をもとに広く検討した。それらに共通の体験学習技法としてロールプレイが有用であることから、演劇的知による自己内省と自らを主人公としたドラマをグループで行う「サイコドラマ」を遠隔で試行し、とくにデジタルファシリテーションの手法による他者との新たな関係作りを支援する方法を開発した。また、即興劇で自己と他者との間に起こる葛藤を表現する体験の有効性を確認した。

#### 介入モデルの実践化

最終年度にはかなりの授業が対面に復帰したことを受け、図1の介入モデルをもとに、学生が創造的な葛藤調整をやがては自力で試みていけるよう、効果的な発見学習が成り立つ状況や道具立ての検討を進めて教職科目の一部に組み込んだ。介入モデルには、葛藤体験をロールプレイで再現し、個人的体験の言語化と社会文化的省察を経て、再度ロールプレイを試行し体験学習の場に応用していく、というサイクルを含んでいる。この過程では、自身の思考や行動を俯瞰できるマインドフルネスの訓練が有効と考えられた。また、社会関係は様々な不平等な関係性のもとで編制されていることから、教育の場において同調圧力やそれに抗するコミュニケーションを扱う際には、ジェンダーやセクシュアリティ、エスニシティなど様々な不平等な社会関係と関連づける視点も不可欠であった。

### (3) 出版物の制作

対人葛藤の調整および広義のコンフリクト・マネジメントに関する教育方法のレビューから、大学教育改善に資する実践研究を行っておられる方々にも加わっていただいで出版物を制作した(『共生社会の大学教育：コミュニケーション実践力の育成に向けて』東信堂、2024年4月発行、全256頁)。内容構成は下記の通り。

#### 第一部 社会的葛藤と高校教育・大学教育

##### 第1章 高校教育におけるコミュニケーション実践力の育成 - 高大接続の在り方

##### 第2章 対立や葛藤の調整が埋め込まれている大学授業の創造

##### 第3章 キャリアの多様性と社会正義を志向するライフキャリア教育の実践

第二部	コンフリクトを介した学びと成長
第4章	行動変容と対話 - コンフリクト・マネジメント能力の向上のための学習活動
第5章	紛争を転換する能力の育成 - バイナリーを越えて平和アプローチへ
第6章	身体視点からのコンフリクト・マネジメントの基礎づくり
第三部	学生にみられるコミュニケーションの課題と支援方策
第7章	学生の「コミュニケーション強迫」と「学校人格」の様相と「潜在的ニーズ」 - 「匿名性」を活用した遠隔授業の試みからみえたこと
第8章	多様な学生たちがそれぞれの人生を生き抜く力を育てる大社接続
第9章	演劇的手法を活用したコミュニケーション教育からのアプローチ
終章	まとめ - コミュニケーション実践力の育成に向けて

#### (4) 本研究成果の意義

大学教育でも、最近では米国の大学団体 AAC&U (Association of American Colleges and Universities) などによって全人的教育の重要性が主張されており (Shoem et al., 2017 など)、対人関係だけでなく知的な学習をも促進する社会情動的技能の育成への関心は高い。様々なプログラムが導入されているが、それらのなかでも特にマインドフルネス(体験への丁寧な気づき)の効果が確認されている (Conley, 2015)。日本では大学生の社会情動的技能の向上を図るプログラムはあまり報告されていないが、国外でも、大学生の対人葛藤調整に焦点を当てたものはほとんど報告されていない。

本研究は、多文化共生の課題に直面しながら、日本の文化的特徴として潜在化したり回避されたりしやすい対人葛藤の体験を取り上げている。そこでの効果的な介入モデルについて知見を蓄積していくことができれば、日本発の新たな社会情動的学習の方法として国際的にも独自の貢献をなす。社会文化的な省察をふまえた創造的葛藤調整の方法を習得することは、今後の社会人にとって必須の前提とも考えられることから、コロナ禍で当初計画を大幅に変更せざるを得なかったとはいえ、大学教育改善の具体的な方向を示す出版物を制作できたことは本研究の大きな成果である。

#### <引用文献>

- Conley, C. S. (2015). SEL in higher education. In J. A. Durlak, C. E. Domitrovich, R. P. Weissberg, & T. P. Gullotta (Eds.), *Handbook of social and emotional learning* (pp. 197-212). Guilford.
- 土井隆義 (2014). つながりを煽られる子どもたち 岩波ブックレット
- 原田知佳ほか (2014). 日・韓・中・米における社会的自己制御と逸脱行為との関係 パーソナリティ研究, 22, 273-276.
- 木村忠正 (2012). デジタルネイティブの時代 平凡社新書
- 大淵憲一 (2015). 紛争と葛藤の心理学 サイエンス社
- Schoem, D., Modey, C., & St. John, E. P. (Eds.). (2017). *Teaching the whole student*. Stylus.
- 山地弘起・川越明日香 (2020). 公的自己意識がアクティブラーニングの効果に及ぼす影響 日本教育工学会論文誌, 44(Suppl.), 205-208.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 5件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 保崎則雄・富永麻美	4. 巻 92(1-2)
2. 論文標題 創造性を創発し、協働での学びを育てる授業「Media Production Studies」のデザインと実践、その評価	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 福島大学経済学会「商学論集」	6. 最初と最後の頁 69-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 富永麻美・保崎則雄	4. 巻 29(2)
2. 論文標題 映像制作のオンライン授業における協働作業によって学びが生起する様相の分析	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 教育メディア研究	6. 最初と最後の頁 29-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 富永麻美・保崎則雄	4. 巻 36(1)
2. 論文標題 大学生がオンラインで映像制作を協働する過程において形成される態度と変容する意識	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 人間科学研究	6. 最初と最後の頁 15-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Gehrtz三隅友子・仙石桂子	4. 巻 -
2. 論文標題 地域と作る演劇の意義ーオンライン演劇の可能性ー	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 第35回日本語教育連絡会議論文集	6. 最初と最後の頁 137-146
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山地弘起, 川越明日香	4. 巻 44(Suppl.)
2. 論文標題 公的自己意識がアクティブラーニングの効果に及ぼしうる影響	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本教育工学会論文誌	6. 最初と最後の頁 205-208
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 寺田恵理, 野田眞理, 保崎則雄	4. 巻 25
2. 論文標題 日本語学習者のディスカッション運営力を高める振り返りの試み	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 京都大学高等教育研究	6. 最初と最後の頁 25-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

[学会発表] 計30件(うち招待講演 0件/うち国際学会 5件)

1. 発表者名 田中東子
2. 発表標題 SNS空間のジェンダーに関わるマイクロアグレッションについて、フェミニズムの知見からの問題提起
3. 学会等名 日本精神神経学会シンポジウム
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 田中東子
2. 発表標題 #MeTooの輝きの後に: メディア文化とフェミニズムの不幸な関係を問い直す
3. 学会等名 韓国日本学会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 田中東子
2. 発表標題 メディアテクノロジーとジェンダー：社会的課題とメディアテクノロジーに対する信頼回復に向けて
3. 学会等名 政策研究フォーラム・改革政策研究会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 富永麻美・西村昭治・保崎則雄
2. 発表標題 社会人大学eスクールの授業においてディスカッションが継続して展開するスレッドの特徴の分析
3. 学会等名 第30回大学教育研究フォーラム
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 山地弘起
2. 発表標題 社会的公正の教育におけるマインドフルネスの応用 - 文献的検討 -
3. 学会等名 第30回大学教育研究フォーラム
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Gehrtz三隅友子
2. 発表標題 デジタルファシリテーターとしての教師の役割ー大学間交流活動の新たな展開ー
3. 学会等名 第25回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山地弘起・鈴木有香・奥本京子・勝又あずさ
2. 発表標題 コンフリクト状況への創造的な対応力をどう育てるか(参加者企画セッション)
3. 学会等名 第29回大学教育研究フォーラム
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Yamaji, H.
2. 発表標題 Effects of mindful somatic psychoeducation at a Japanese university.
3. 学会等名 International Congress of Psychology 2020+ (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山地弘起
2. 発表標題 高等教育における葛藤対処・社会的公正への教育動向：マインドフルネスの応用に焦点をあてて
3. 学会等名 日本心理学会第85回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山地弘起
2. 発表標題 ネガティブなジェンダー・ステレオタイプへの対応 女子大学生の自由記述に基づく探索的検討
3. 学会等名 第28回大学教育研究フォーラム
4. 発表年 2022年



1. 発表者名 山地弘起・田中東子・谷美奈・保崎則雄・Gehrtz三隅友子
2. 発表標題 参加者企画セッション 社会関係における創造的非同調の諸相 大学教育実践での試みから
3. 学会等名 第28回大学教育研究フォーラム
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 富永麻美・保崎則雄
2. 発表標題 大学生が授業で行う協働制作における合意形成と自己との対話の分析
3. 学会等名 第28回大学教育研究フォーラム
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山地弘起
2. 発表標題 コンフリクトマネジメント教育：論文タイトルに基づいた動向分析の試み
3. 学会等名 第27回大学教育研究フォーラム
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山地弘起, Gehrtz三隅友子, 保崎則雄, 谷美奈, 田中東子
2. 発表標題 参加者企画セッション オンライン学習環境での学生の関係様式：教員としての気づきと展望
3. 学会等名 第27回大学教育研究フォーラム
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 富永麻美, 藤城晴佳, 保崎則雄
2. 発表標題 オンライン授業「映像制作」による協働作業が学びに組み込まれる様相の分析
3. 学会等名 第27回大学教育研究フォーラム
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Gehertz三隅友子, 仙石桂子
2. 発表標題 オンラインでインプロを体験してみよう! -演劇の知を教育実践に-
3. 学会等名 第16回大学教育カンファレンス in 徳島
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yamaji, H.
2. 発表標題 Effects of a mindful somatic psychoeducation course at a Japanese university.
3. 学会等名 American Psychological Association Annual Convention, Chicago. (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hozaki, N., Fujishiro, H., Sekine, H., & Saito, T.
2. 発表標題 A hope list of re-evaluating parameters and actual problems to solve in EMI-based "media production studies" class.
3. 学会等名 International Conference on Foreign Language Education and Technology, Waseda University. (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Sekine, H., Fujishiro, H., & Hozaki, N.
2. 発表標題 Introduction of significant and applicable aspects in educational settings in Denmark.
3. 学会等名 International Conference on Foreign Language Education and Technology, Waseda University. (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山地弘起
2. 発表標題 大学生における対人関係の探索的検討 学生自身の振り返りの記述から
3. 学会等名 第26回大学教育研究フォーラム
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Gehrtz三隅友子
2. 発表標題 地域と作る演劇の意義 - 多文化共生に向けて -
3. 学会等名 国際表現言語学会第8回大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 山地弘起 (編著)	4. 発行年 2024年
2. 出版社 東信堂	5. 総ページ数 239
3. 書名 共生社会の大学教育：コミュニケーション実践力の育成に向けて	

1. 著者名 保崎則雄・富永麻美・北村史	4. 発行年 2023年
2. 出版社 唯学書房	5. 総ページ数 169
3. 書名 対話を重視した新しいオンライン授業のデザインを創る	

1. 著者名 保崎則雄・藤城晴佳	4. 発行年 2021年
2. 出版社 早稲田大学出版部	5. 総ページ数 229
3. 書名 海外研修×ディープ・アクティブラーニング	

1. 著者名 田中東子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 北樹出版	5. 総ページ数 194
3. 書名 ガールズ・メディア・スタディーズ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	保崎 則雄  (HOZAKI Norio)  (70221562)	早稲田大学・人間科学学術院・教授    (32689)	
研究分担者	三隅 友子  (MISUMI Tomoko)  (20325244)	徳島大学・国際センター・教授    (16101)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	田中 東子  (TANAKA Tohko)  (40339619)	東京大学・大学院情報学環・学際情報学府・教授    (12601)	
研究分担者	谷 美奈  (TANI Mina)  (60582129)	帝塚山大学・全学教育開発センター・教授    (34601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関